OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	ネットワークにおける感情論理の分析
Author(s)	渡邊, 太
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44825
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【2】

氏名	渡邊（わたなべ）　太（ふとし）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　18084　号
学位授与年月日	平成15年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科社会学専攻
学位論文名	**ネットワークにおける感情論理の分析**
論文審査委員	（主査） 教　授　直井　優 （副査） 教　授　木前　利秋　助教授　川端　亮

論文内容の要旨

人間は、様々な感情を経験しながら生きている。理性的な推論や観念が現実的な力となるのは、それらに感情が充当されたときである。感情は、理性的な推論や思考に対立すると一般に考えられているが、実際には連動して機能する。本稿では、イデオロギーや推論を駆動する3項関係の感情論理に焦点を合わせて、ソシオン理論の視座から人間と社会について考えるための基本的な分析枠組の構築を試みる。

第1章から第5章までの第1部では、ソシオン理論を応用して感情論理を分析するための枠組を整理する。第6章から第8章までの第2部では、その枠組を用いて、宗教におけるネットワークの感情論理を分析する。宗教現象は人間の合理性を前提にすると理解しにくい側面があるが、感情論理の視点に立つと理解しやすくなる。

第1章では、ソシオン理論の基本的なモデルを整理する。ネットワークにおける感情論理は、3項関係（トリオン）の荷重演算論理にもとづく。トリオンは、主観的現実を構成する予期の演算装置を指す概念である。トリオンの荷重演算は、F. Heider の均衡仮説と一致する。トリオンは3つの正の関係か、2つの負の関係と1つの正の関係のとき安定する。安定トリオンは、確信や納得、腑に落ちる感じをもたらし、信憑構造を強化する。

第2章では、ソシオン理論の荷重概念について検討する。荷重は予期のポテンシャル量で、リアリティの質感をもたらす脳の機能と仮定される。荷重は、他者とのコミュニケーションに応じて増減する。荷重によるリアリティ構成についての考察は、人間の意味世界を理解する上で重要になる。

第3章では、リアリティの視点依存性を分析するネットワーク・モデルについて検討する。ネットワークにおける共同主観性はいつでも成り立つとは限らない。ソシオン理論の枠組みは、共同主観性が捻れたまま進行する「ネットワーク反対効果」など複雑な社会過程の分析に適している。

第4章では、2項関係の対称性/非対称性について考察する。自己と他者の関係を3項関係として捉えると、支配と服従の共依存のような非対称的関係が安定することを合理的に説明できる。

第5章では、信頼と不信について考察する。従来の信頼研究では、しばしば不信の問題が見過ごされている。しかし、負の関係は正の関係の単なる欠如ではなく、ネットワークにおいて積極的な機能を担う。3項関係による信－不信の分析は、自己成就的予言、嫉妬の妄想、密告と粛清の恐怖政治の解明を目指している。

第6章では、オウム真理教の無差別テロリズムについて検討する。教団の犯罪を洗脳やマインド・コントロールとして片付けてしまうのではなく、ネットワーク動作のうねりから不信と妄想が増大していく過程の記述・分析を試み

ている。理想を目指す運動には、世界の破壊に向かう危険が潜在する。

第７章では、統一教会への入信と脱会をめぐるネットワークの運動について考察する。入信と脱会は、真理の信憑性を構成するネットワーク動作にかかわる。特定の安定トリオンにはまったとき、人は後戻りできない意味の世界に入り込む。用いるデータは、主として統一教会の信者と元信者およびその家族を対象として実施した聞き取り調査による。

第８章では、密告と粛清や魔女狩りのような荷重の高圧化によるネットワークの存在拘束から自由になる可能性について検討する。感情論理が高圧化すると、人は不可能な希望を夢見て犠牲を払い続けることになる。そうした状況から解放される可能性を、G. Bataille と J. Krishnamurti の思索のうちに探る。

感情論理を形式的な関係パタンとして取り出すソシオン理論の枠組は、複雑な社会状況を解きほぐし、正確に記述・分析する道具を提供する。３項関係モデルによる感情論理の分析は、一見すると非合理的に思える現象が実は一定の論理にもとづくことを合理的明証的に説明できる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、論理的には扱いにくい感情を、その発生に一定の論理があるという視点から理論的に考察し、カルト宗教に適用したものである。

ソシオン理論の３項関係モデルを理論的に検討し、感情論理のネットワーク分析の枠組みを構築し、その枠組みにしたがって、オウム真理教の破壊活動と統一教会への入信、脱会を分析している。そして、狂信的とも思える非合理的な崇拝が負の否定によってもたらされることを論理的に納得できる図式が提示されている。

膨大な文献にあたる一方で、カルト宗教の信者の調査も行ったうえで、信者でないものには非合理的としか見えないものを理解可能なものとして提示した本論文は、これまでのマインドコントロールということばでカルトを非難していた宗教社会学のカルト研究とは一線を画する研究であり、高く評価できる。

以上により本論文は、博士（人間科学）の学位に充分に値すると判定した。